女と時間と日本経済

緩急を操る

「三時間待って三分診療」が少なくない日本の医療サービスに、変化の兆しが表れている。

東京・世田谷の「用賀アーバンクリニック」が打ち出したのはクイック診療。軽い風邪や花粉症程度であれば、患者が来院する前にインターネットを通じて症状や予約時間を記入してもらう。薬をもらって帰るまで、患者の滞在時間はわずか七分。「薬局で薬を買うのと同じ手軽さ」とマッキンゼー出身で発案者の大石佳能子さん（41）。

入院の必要がない「日帰り手術」も利用できるようになってきた。足の血管が腫れる下肢静脈瘤（りゅう）など十数種の手術を実施する「北青山ディークリニック」（東京・渋谷）は手術予約が二カ月先までいっぱい。患者は多忙なビジネスマンなどが目立つ。つい間

約1時間、じっくりと医療相談を受ける聖路加国際病院の日野原重明理事長（東京都中央区）＝写真　進藤秀幸

板ヘルニア手術を、レーザーを使って数十分で終える病院もある。

病院の待ち時間解消をビジネスととらえ、清水建設は経営コンサルティング事業を始めた。病院の施設配置や来院者数、電子カルテの導入状況などを調べ、どこをどう改善すれば待ち時間が減るかを解析。これを経営改善に生かす。

短時間診療がうける一方で、信頼できる医者にじっくり診てもらいたい、というニーズもある。

「じっくり」と「スピード」医療にも新風

「いらっしゃいませ。どうぞこちらへ」。女性がにこやかに出迎える。東京タワーに程近い高層ビル内にある「クリントエグゼクリニック」は、二〇〇一年十二月に開院した、保険が利かない自費診療の診療所。

患者は完全予約制。近くの東京慈恵会医科大学の教授や助教授らが派遣されて診察する。経営は別だが、慈恵医大のVIP外来として口コミで評判が広まっている。診察料は三十分二万円、人間ドックなら最高三十六万円もするが、「時代の要請に基づく良い意味の差別化」と、有広忠雅院長（69）は明快だ。

聖路加国際病院（東京・中央）も病院とは別会社で相談事業を営む。同院の有名医師に予約を入れて面会する。医師は納得するまで話を聞き、時には自宅の電話番号まで教えて患者の不安に向き合う。「医療こそ時間が必要。話を聞いてあげるだけで症状が和らぐ」と日野原重明理事長（91）。三十分二万円だが、岩手県からきた六十代の相談者は「高くはない」。

希望の時間で商品が提供できなければビジネスチャンスを失うのは他の業種では当たり前。医療にもようやく「常識」が浸透し始めた。